

第 2 章 明暦大火の出火・延焼経過

第 1 節 火災の発生状況と当時の気象状況

明暦大火発生前の気象状況と火災 明暦 3 年（1657）、江戸では正月早々多くの火事に見舞われた。正月 2 日の午前 9 時ごろ、半蔵門外の越後 25 万石、松平光長^{まつだいらみつなが}の屋敷から出火したが、大邸宅であったため他家に延焼しないで済んでいる。5 日は快晴であったが、昼過ぎから風が強くなり、夜 10 時ごろ、中^{ちゅうげん}間町（現在の千代田区駿河台の辺り）から火が出て明け方まで燃えた。このように、「明暦の大火」と呼ばれる大火の発生以前に、すでに正月初めから連続して火災が発生していたのである。



图 2-1 新添江戸之図（明暦 3 年、東京都立中央図書館所蔵）大火直前の江戸の姿

その当時の江戸は、前年から 80 日以上も雨が降っておらず、大変乾燥した日が続くという気象状況にあり、火災が多発していた。1 月 17 日から、北西の風が吹きだし、18 日の朝にはいちだんと風が激しくなり、同日の午後 2 時ごろ、北寄りの風から西風に変わった。すなわち、明暦の大火は、乾燥という出火しやすい条件と、延焼速度を速める強風という、火災危険にとって 2 つの悪条件が重なっているときに発生したものであった。

明暦大火の発生状況 「明暦の江戸大火」と呼ばれている大火は、明暦 3 年（1657）1 月 18 日から 19 日（太陽暦では、現在の 3 月 2 日から 3 日）にかけて発生、延焼した、3 件の大規模火災の総称である。3 件の火災の出火時間と出火場所は、それぞれ以下のとおりである。

1 月 18 日午後 2 時ごろ本郷丸山の本妙寺（現在の文京区西片 2 丁目）から出火。

1 月 19 日午前 10 時ごろ、小石川鷹匠町（現在の文京区小石川 3 丁目）から出火。

1 月 19 日夜、麴町（現在の千代田区麴町 3 丁目）から出火。

さて、最初の火災は、明暦 3 年（1657）1 月 18 日の昼過ぎ、江戸の北、本郷丸山にあった日蓮宗本妙寺（正式名称は徳栄山惣持院本妙寺）から出火した。出火原因については、放火、失火と両説あるが、なかでも別名「振袖の大火」としても伝説にもなっている逸話がある。ただし、これらの出火原因をめぐる事実の真偽のほどは確かではなく、また、この点についての説明は本稿における主たる目的ではないので、特に本文中で取り上げることはしない。本章末のコラム「ふりそでんせつ振袖伝説」を参照されたい。

第2節 火災の延焼経過

18日の延焼経過 本妙寺から出火した火災は、折からの北西の強風により飛び火がしきりに舞い上がり、本郷一丁目（現在の本郷二丁目）付近からも火の手が上がり、湯島から駿河台方向に燃え広がる形勢であった。一方で、本郷一丁目から風上へと延焼していったが、この火は本郷六丁目あたりで鎮火した。湯島方面に延焼した炎は湯島天神社、神田明神社、東本願寺と次々と延焼した。炎はこの付近から南に進み駿河台の諸大名の邸宅を次々に焼き払い、鎌倉河岸（現在の千代田区内神田の南部）に燃え広がった。神田明神から烈風により乱れ飛んだ火は、村松町（現在の中央区東日本橋）、材木町（現在の千代田区神田岩本町）付近を荒れ狂い、柳原（現在の万世橋から浅草橋までの神田川南岸一帯）から和泉橋までを焦土とした。

駿河台の火は、二手に分かれ、一方は誓願寺から迂回して進んだが、もう一方は須田町から鍛冶町（現在の千代田区神田鍛冶町）、白銀町（現在の中央区日本橋）とまっすぐに南下した。夕刻から風が急に西へと変わり、鎌倉河岸の火は神田橋には移らず、遠く隔てた鞆町（現在の中央区日本橋本石町）へと飛び火し、東に延焼して伊勢町（現在の中央区日本橋本町）より江戸橋付近で川を越え、茅場町（現在の中央区日本橋茅場町）まで延焼した。火は東方向に拡大し、八丁堀まで延焼した。さらに、靈巖寺のある靈巖島へと延焼し、靈巖寺に逃げ込んだ 9600 人あまりの生命を奪った。靈巖寺の火は、強風のために停泊していた舟に燃え移り、その飛び火によりはるか海を隔てた佃島（現在の中央区佃一丁目）や石川島（現在の中央区佃二丁目）にまで達した。

隅田川を隔てた向島八幡宮も火の粉により焼失した。火災は強い西風にあおられて、吉原に迫った。吉原もあっという間に焼失し、さらに西の境町（現在の中央区日本橋人形町の辺り）にも飛び火した。境町と堀を隔てた堀江町（現在の中央区日本橋小舟町）へも飛び火をして延焼していった。

このころ、火に追い立てられた群衆の巨大な流れは浅草に向かって殺到した。さらに、一時おさまっていた柳原の火が再び燃え始め誓願寺に飛び火した。誓願寺から、近くの大名小路に延焼し、同時に数十の寺院に延焼拡大し、小伝馬町方面からの火と合流し、数万の群集を飲み込んでいった。午後 8 時になっても風は衰えず、火は海岸に並んでいる諸大名の屋敷を次々と灰としていった。火はさらに川を一気に越えて、牛島新田（現在の墨田区両国）の農家をも焼き払った。こうして、延長約 5.3 kmにおよんだ火災も、翌日の午前 2 時過ぎにようやく鎮火した。

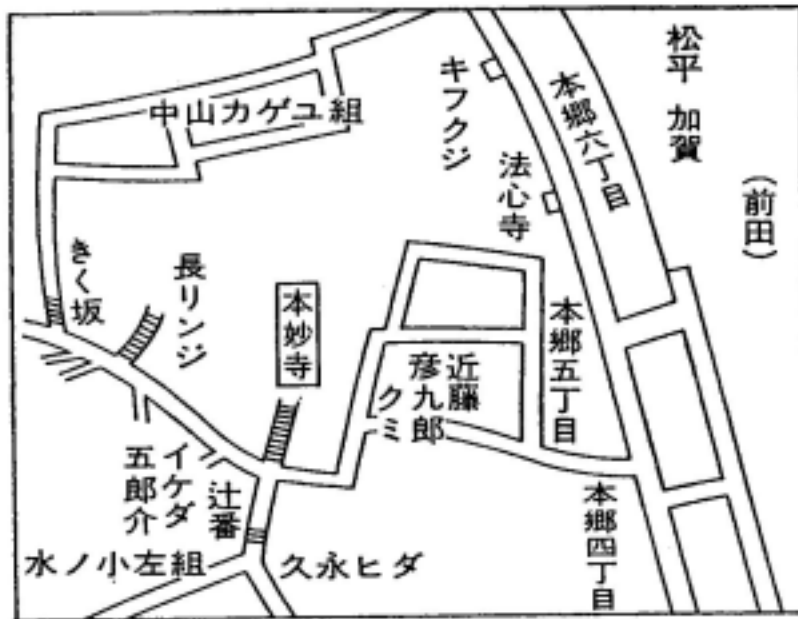


図 2-2 本妙寺付近の地図

(黒木喬『明暦の大火』、講談社、1977、59頁)

19日の延焼経過 - 小石川からの出火 明暦3年(1657)1月19日早朝、前日の大火に続いて、小石川の鷹匠町付近から出火した。水戸藩の屋敷を焼いた火は、堀を越え飯田町から市谷、番町へと延焼拡大していった。正午から午後1時にかけて、天守閣にも燃え移り、さらに午後4時ころには常盤橋内(現在の千代田区大手町2丁目)の大名屋敷などがいっせいに燃え上がった。猛火は、鍛冶橋(現在の千代田区丸の内)の諸大名邸、旗本屋敷などを焼き尽くした。

午後4時頃、北風が西風へと変わり、江戸城西の丸、紅葉山、御三家の上屋敷は焼失を免れた。しかし、火は八重洲河岸(現在の千代田区丸の内)から中橋(現在の中央区八重洲通り)方面に延焼していき、火から逃げまどう群集は焼け落ちた橋などにより徐々に逃げ場を失い命を失うこととなった。火はさらに南の新橋(現在の中央区と港区の境界)、木挽町(現在の中央区銀座)に達し、東は材木町、水谷町(現在の中央区辺り、昭和通り)まで延び、海岸では多くの船も焼失した。

19日夜、麹町からの出火 1月19日夜に入って、風向きが北から西へと変わり始めたころ、麹町5丁目(現在の千代田区麹町3、4丁目)の町家から出火した。火はまたたくまに延焼し、大名屋敷約50を焼失した。さらに、西の丸下(現在の千代田区皇居外苑)の屋敷多数が全焼し、桜田の火は芝浦の海岸にぬけ鎮火した。



図 2-3 炎の中を逃げまどう人々

(『むさしあぶみ』日本随筆大成 第3期6、吉川弘文館、1977、385頁)



- 主な大名屋敷
- ①水戸 (小石川) ②藤堂
 - ③前田 ④紀伊 ⑤水戸
 - ⑥尾張 ⑦池田 (岡山)
 - ⑧井伊 ⑨上杉 ⑩浅野
 - (赤穂) ⑪毛利 ⑫伊達
 - ⑬鍋島 ⑭松平 (越後)
 - ⑮酒井 (忠清)

図 2-4 主な大名屋敷の存在場所

(黒木喬『明暦の大火』、講談社、1977、67頁)



図 2-5 3 か所から出火した火災の推定延焼経路
(黒木喬『明暦の大火』、講談社、1977、66 頁)

第3節 明暦大火の特徴と被害状況

明暦大火の特徴 明暦大火以前の江戸の消防体制は、第1章第3節「大火以前の防火・消火政策」でも触れたように、大名火消の制度や町人の消火体制が徐々に形成されつつあったとはいっても、実際にはいったん火がつくと延焼を食い止めることができずに大火になってしまうことが多かった。また、装備、技術とも後年の江戸町火消のようなレベルにはまだ程遠く、消火活動としては燃えている家屋は放置し、その周辺にある家屋を破壊して延焼を止めようとする、いわゆる「破壊消防」に頼らざるを得ない状況であった。したがって、消防装備うんぬん以前に、消防制度そのものが十分に整備されておらず、火消（消火活動）の資料もほとんど残されていない時代の火災であったことをまず指摘しておかねばならない。

明暦の大火の時期では、江戸に存在した建物自体がきわめて燃え易い構造であり、鎮火は風がおさまったことによるところが大きく、川や運河、海による焼け止まり以外には効果的に消火した例はないに等しい。消火活動も、火災の規模が巨大になって混乱が大きくなると、人手不足と混乱でほとんど効果をなさなかつたようである。

延焼被害 この火災による延焼被害程度については諸説があるが、地域的には、現在の千代田区と中央区のほぼ全域、文京区の約60%、台東区、新宿区、港区、江東区のうち千代田区に隣接する地域一体が焼失したと考えられる。

地域内の焼失家屋数は、「明暦炎上記」によると、

- ・大名屋敷は160、江戸城は西の丸をのぞき焼失、
- ・旗本屋敷は約810、
- ・町人町は、800町余が焼失した。

これらは、大部分の大名、旗本の屋敷及び下町のほとんどであり、当時の江戸の市街地の約60%を焼亡した。このほか、神社仏閣300余、橋60余、倉庫9000余が焼失したと伝えられている。

延焼拡大の要因には、火災発生以前の乾燥状態と出火当時の強風が挙げられるが、とりわけ明暦の大火の最大の特徴は飛び火による延焼拡大の早さであり、その結果、風下側にきわめて早いスピードで直線的に延焼が進んだことが上げられる。明暦の大火は、第2次世界戦後の大火と比較して数倍速い延焼速度であったと考えられ、消防力の不足、建物の構造、材質の影響だけではなく、風下側への飛び火による影響も大きく寄与していたものと考えられる。また、

この大火では、飛び火によって隅田川を越えての延焼、運河を越えての延焼なども見てとれる。

火災による死者 明暦の大火では、早い延焼のために混乱した群衆が風下側に逃げると、飛び火によっておきた風下側の火災と挟まれた形で逃げ場を失い、多くの命が奪われたといわれる。また、この大火での死者は、焼死以外に、橋が火災で落ちてしまったために川岸に追い詰められ、川に飛び込んだことによる死者や大火後の凍死者、餓死者も多かったと記録されている。さらに、混乱の中で、逃げた馬などにつぶされたりして多数の死者が発生したとの記録もあり、大火時のすさまじい混乱の様子を記す資料も残されている。その中には、突然炎に包まれるなどの例が報告されており、これは屋根裏などに入った火の粉によってある時間経過した後、一気に発火、炎上したのではないかと考えられる。

また、避難民が持ち出した荷物を道路や空地に積み上げたために、消火活動が妨げられたり、これらに吹き付ける火の粉や輻射熱によって着火して、混乱の中で多くの人が火災に巻き込まれ焼死したとも伝えられている。幕府は、このためにこの火災以降、車に荷物を積んで避難することを禁止した。また、町民は財産保護のために穴蔵（地下室）を設けたとされている（第3章のコラム「火事と穴蔵」参照）。

さて、死者数については『むさしあぶみ』をはじめ、『本所回向院記』、『山鹿素行年譜』などが、いずれも10万人台と書いているのに対し、『上杉年譜』、『天享吾妻鑑』、『明暦三丁酉日記』などは3万7000人余りとしている。この中間の6万8000余人という数字をあげているのが『元延実録』で、大火後、牛島新田（現在の墨田区両国）に葬った死者6万3430余人のほかに、漂着した死体を4,654人と記している。このように、当時から明暦の大火による死者数には諸説があったが、この数字がだいたいの実相を伝えているとみてよいのではなかろうか。

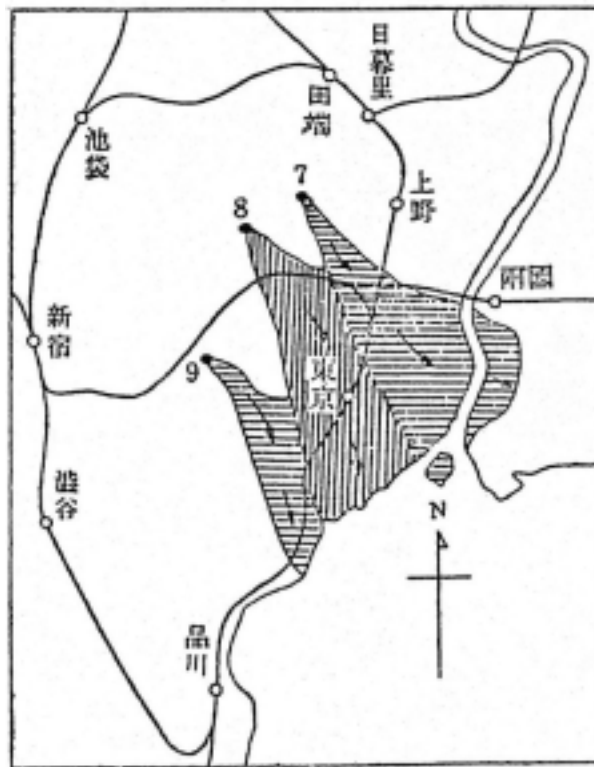


図 2-6 明暦大火の延焼被害地域図

(竹内吉平『火との闘い(江戸時代編) - 消防戦術のルーツをたどる』、近代消防社、1993、78 頁)

参考文献

黒木喬(1977)：「明暦の大火」講談社

竹内吉平(1993)：「火との闘い(江戸時代編) - 消防戦術のルーツをたどる」近代
消防社

東京市役所編纂(1917)：「東京市史稿」変災篇第四 東京市役所

* コラム：^{ふりそででんせつ}振袖伝説 *

古来、「明暦の江戸大火」を別名「振袖火事」ともいう。振袖にまつわる因縁話が、この火事にはつきまどってきたからであり、代表的なものとしては、^{やだそうろうん}矢田挿雲の『江戸から東京』（1920年刊）に紹介された逸話である。簡単に要約すると、次のようになる。

麻布の百姓町の質屋、遠州屋の一人娘梅野が、承応3年（1652）3月、菩提寺の本郷本妙寺に参詣の途次、すれちがって^{うえののやま}上野山に姿を消した寺小姓の美少年に魅せられ、深い片想いに落ちた。両親は例の寺小姓を探したがどうしても見つからず、せめてもの慰めに同じ模様の振袖を作ってやったところ、娘はその小姓をしのびつつ^{めあと}夫婦遊びばかりするようになった。ついに明暦元年（1655）正月16日、梅野は17歳で焦れ死んでしまった。遠州屋では、梅野の葬儀の後に、振袖を本妙寺に納めた。住職はいつものことながら、これを古着屋に売った。

ところが、翌年、梅野の命日に、上野山下の紙商大松屋の娘きの（17歳）の葬式があり、この振袖が再び本妙寺に納まったのである。それをまた売り飛ばすと、次の年の同月同日に、本郷の麴屋の娘いく（17歳）の葬式に、三たび、この振袖が本妙寺に納まった。

振袖にまつわる妄執のあまりの恐ろしさに、住職は怖気をふるい、ついに明暦3年（1657）正月18日、3人の娘の親を施主にして^{せがき}大施餓鬼を修し、^{にわび}燎火に投じて振袖を焼くこととなった。前日の17日以来、江戸は季節風の北西の風が吹きすさんで、18日になってもいっこうに静まる気配がなかった。住職が、この烈風の中で振袖を燎火に投じた時、一陣の竜巻が北の空から舞下がり、袖模様に火がついた振袖を、さながら人間の立った姿そのままに、地上80尺余（約25m）の本堂の真上に吹き上げ、この御堂を燃え上がらせた。

ここに、本妙寺が明暦大火の火元となった所以が記されているのである。もちろんこの話は当時の火災に関する記録には現れてこないし、事実とは異なるものである。しかし、大火前に流行った^{しばがきぶし}「柴垣節」のもと歌に振袖にまつわる歌詞が見られ、振袖は、当時、小姓の着物であった。このことから、江戸の人々に「柴垣節」が明暦大火の不吉な前兆として、あるいは受け止められていたのかもしれない。ここに「振袖伝説」が生まれる素地ができてきたのである。



図 2-7 振袖姿の小姓
(『江戸名所図屏風』部分、財団法人出光美術館所蔵)